

■ 書 評

うつ病治療ハンドブック
—診療のコツ—

大野 裕 編
金剛出版 2011年1月
365頁、定価 4,830円

日常臨床でうつ病の治療に難渋した時に役立つコンパクトな書籍として企画したようで、編者の意向により、一人の精神科医の経験に偏りすぎることを避け、海外の知見を交えたエビデンスに基づいたうつ病治療のハンドブックである。

従来のハンドブックと違って、うつ病の基本的病態、病因、症状などは最小限にまとめられ、むしろ様々な状況におけるうつ病を取り上げて、その特徴を分かりやすく説明している。治療のガイドラインに則って、お決まりの治療をするだけでは、寛解にまで導くことができないことを多く経験している。それは、個々の患者をうつ病という単一の疾患としてひとくくりできないからである。10人のうつ病患者がいれば、10人それぞれ異なった様相を呈するものである。患者はそれぞれに違った家庭に生まれ、成長し、生活を営み、また年齢層も違えば、抱えている合併症も異なるであろう。そのことを考慮することでテラーメイド診療が実践できるのである。

この本の構成では、最近のトピックも含めわかりやすくうつ病や双極性障害について概説している総論に引き続いて、II部の各論では、子供や思春期、働き盛りの壮年期、老年期、妊娠、出産、閉経など女性特有のうつ病などライフサイクル毎、

また、他の精神疾患や身体疾患とうつ病との関係について細かく分けて丁寧に説明を加えている。臨床で遭遇する様々なバリエーションを持ったうつ病を網羅し、所々に分担執筆者の臨床経験のエキスが散見される。

III部の治療では、身体治療と精神療法に分け、第一線の臨床医によるエビデンスに基づいた最新の治療知見を交えて図表を用いて分かりやすく説明している。うつ病の治療は薬物治療に偏りがちであるが、うつ病を退治するために薬物療法以外の方法論を兼ね備えていればより診療にゆとりが生まれてくるものである。日本で行われている最先端のうつ病治療の概略を掴むことは、そのまま実践できなくても何かヒントがつかめることと思われる。

IV部の社会とうつ病では、うつ病患者の背景にある社会についていつも注意と関心を払うことの重要性を我々に喚起している。自殺や過労死問題を始め、復職に向けてソフトランディングさせるための支援などを扱うことが急務であり、またうつ病の発病、再発を予防するための働きかけの重要性を改めて気づかせてくれる。一つの医療機関でのうつ病治療には限界があり、社会資源を利用した包括的な治療の取り組みが望まれている。

また、この本の中では、非専門医がうつ病を治療するときの注意点、うつ病治療の経済学など精神医療の現状において関心の高い7つの問題をコラムとして取り上げて、気楽に読めるように工夫している。

この書を一読することで、幅広くうつ病の治療を理解することができ、レジデントのみならず、日ごろうつ病診療を行っている医師が、治療に行き詰ったときに、改めてうつ病を別の角度から考え直す機会を与えてくれる書と言える。

(忽滑谷 和孝)